

Title	巻頭言 「非合理性の合理化」と「合理化の非合理性」
Author(s)	土方, 透
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-3 : 1
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2324
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「非合理性の合理化」と「合理化の非合理性」

古代ギリシャにおける哲学の成立以来、およそ人類の学知は、世界を秩序ある調和した全体として、すなわちコスモスとして把握し、その秩序の解明に関わってきた。われわれは混乱を平静から論じ、戦争を平和から論じ、齟齬を合意から論じてきた。不均衡を均衡へ、逸脱を正常へ向かわせるべく論を展開してきたといえる。しかし、ユートピアに到達することはなかった。問題はさらに錯綜するばかりであった。こうしたなか議論は、近年「リスク」なる概念をもって、方向転換を図られることになった。そこではリスクが、異常状態・例外状態として想定されているのではなく、通常の状態とされる。混沌・不安定は、アブノーマルではなくノーマルなものとして理解される。もはや「到達点」はイメージされていない。例を挙げるならば、原発をめぐる最近の議論の変化である。従来、原発については、その安全性（およびその確認・強調）の観点から重点的に議論が行なわれてきた。しかし、現在の議論によれば、安全な原発は存在せず、原発は基本的に危険な存在とされる。したがって、そのリスクをどのように制御していくか、すなわち、事故が起こらない・起こってはならないのではなく、起こりうる事故をどう制御していくかという点に、論点は移動している。リスクに関する議論の傍らで、諦観も増したかのようなのである。

たしかに、複雑化した現代社会では、単線的な因果律で計算される論理、合理的選択モデル、最適化の理論をもって説明される事態が、ますます減少し、すべてが無限の連鎖から生じ、そのプロセスが見えない。リスクはどこまで制御できるのだろうか。制御そのものがリスクを孕んでいるのではないか。当座のリスクを回避した分、見えないリスク、さらに深刻なリスクが惹起されるのではないか。結局、リスクの総量は一定ではないのか。このような疑問は、人間がなお近代化・合理化を継続的に推し進めることができるかどうか、むしろ、信頼すべき精神的・社会的な倫理や制度の意味喪失や無力化が日常的にも了解される社会、また予見可能性・確実性に頼ることが非常に困難になった社会に翻弄されているのではないか、という疑念へと展開していく。

しかし、このことを積極的に読み込むのであれば、近代以降、われわれは合理性を追求する一方で、それを越えた「なにものか」を際立たせていたことになる。だとすると問題は、学問が近代を経て、いまだその「なにものか」を記述する、そうした適切な概念様式を獲得していないという点にあるのではないだろうか。ヴェーバーは「カリスマ」を、アドルノは「理性の野蛮」を、デリダは「法の力」を、ルーマンは「偶発性（Kontingenz）定式としての神」を論じた。もういくつか山が超えられなければならない。